

# 対談編 かがんだ鏡

## オウム真理教と犯罪 上

教祖逮捕という形で、オウム真理教をめぐり地下鉄サリン事件など一連の疑惑についての騒動は、ピークに達しました。「オウム真理教事件」は、戦後走りのついでに日本社会が抱える病の集合体として、噴出したかのように見えます。文化面では、五月に連載した「ゆがんだ鏡—オウム真理教と今」の続編として、犯罪、若者、宗教の三つにテーマを分けて、対談のシリーズを紹介していきます。

や法律を無視している面があった。世俗の道徳とは無関係な別個の価値観に基づいています。だから誤解を恐れずに言えば、その意味では、反社会的行動を起こしても不思議はないし、その可能性は潜在的にあったのです。

朝倉 僕も「革命」という見方はできないと思います。武器や核弾頭の入手まで画策したとか、「早川ノート」にはクーデター計画が記されていたとか報道されました。字面を何げなくみる限りでは革命をイメージさせるかも知れませんが、そこに国家は射程に入っていない。あんな無警戒なやり方で、革命ができるわけも

朝倉 意識的に本気で考える部分と、無意識的にそっぴり自分を追い込んでいく欲求というのが、重なりあっているのではないのでしょうか。オウムに集まった人々からは、あらかじめ自分が裏切られる場所に近いところから、現実への手ごたえを得ようという潜在的欲求を感じます。

橋爪 機関で決定しようにも、機関なんか何もないと思うので、何なのでしょう。

社会学者 橋爪大三郎氏

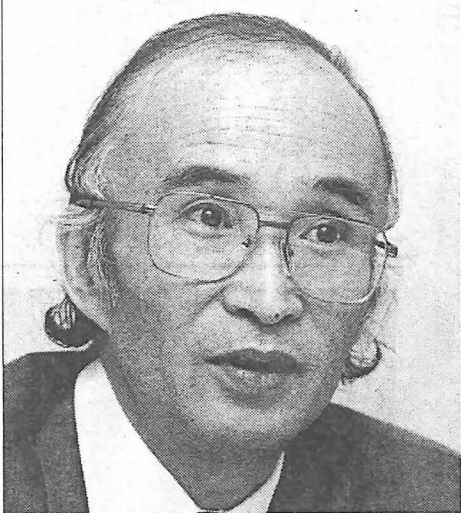


はしづめ・だいさぶろう 1948年神奈川県生まれ。東大大学院博士課程修了。東京工業大学教授。比較宗教社会学専攻。構造主義を踏まえた新たな社会学の構築を目指し、社会現象に対しても積極的に発言を続けている。著書に『性愛論』『仏教の言説戦略』『言語ゲームと社会理論』など。

### 教団の特異性

## 革命と異質な救済計画 現実と敵対関係を願望

評論家 朝倉 喬司氏



あさくら・きょうじ 1943年岐阜県生まれ。早稲田大学文学部中退。週刊誌の事件記者を経て、82年からフリーに。犯罪現場の丹念な取材を通してのルポ、評論を発表。また、河内首領の振興を掲げた独自の音楽評論でも知られる。著書に『犯罪風土記』『芸能の始原に向かって』など。

朝倉 彼らは「救済計画」と言いますが、今のところ事態に至る歯車が回り始めたのは、麻原容疑者が黙示録の字句を現代に当てはめて解釈し出版した一九八九年の「オウム」です。

オウムの「救済計画」は革命と似て非なるものだと思います。革命も救済も、現実に対する強固な否定の意志ですが、革命の場合、その否定のために、現実社会の中に反対勢力を作らねばならないとするリアリズムがあります。

朝倉 彼らは「救済計画」と言いますが、今のところ事態に至る歯車が回り始めたのは、麻原容疑者が黙示録の字句を現代に当てはめて解釈し出版した一九八九年の「オウム」です。

オウムの「救済計画」は革命と似て非なるものだと思います。革命も救済も、現実に対する強固な否定の意志ですが、革命の場合、その否定のために、現実社会の中に反対勢力を作らねばならないとするリアリズムがあります。

朝倉 彼らは「救済計画」と言いますが、今のところ事態に至る歯車が回り始めたのは、麻原容疑者が黙示録の字句を現代に当てはめて解釈し出版した一九八九年の「オウム」です。

オウムの「救済計画」は革命と似て非なるものだと思います。革命も救済も、現実に対する強固な否定の意志ですが、革命の場合、その否定のために、現実社会の中に反対勢力を作らねばならないとするリアリズムがあります。

朝倉 彼らは「救済計画」と言いますが、今のところ事態に至る歯車が回り始めたのは、麻原容疑者が黙示録の字句を現代に当てはめて解釈し出版した一九八九年の「オウム」です。

オウムの「救済計画」は革命と似て非なるものだと思います。革命も救済も、現実に対する強固な否定の意志ですが、革命の場合、その否定のために、現実社会の中に反対勢力を作らねばならないとするリアリズムがあります。

朝倉 彼らは「救済計画」と言いますが、今のところ事態に至る歯車が回り始めたのは、麻原容疑者が黙示録の字句を現代に当てはめて解釈し出版した一九八九年の「オウム」です。

オウムの「救済計画」は革命と似て非なるものだと思います。革命も救済も、現実に対する強固な否定の意志ですが、革命の場合、その否定のために、現実社会の中に反対勢力を作らねばならないとするリアリズムがあります。

朝倉 彼らは「救済計画」と言いますが、今のところ事態に至る歯車が回り始めたのは、麻原容疑者が黙示録の字句を現代に当てはめて解釈し出版した一九八九年の「オウム」です。

オウムの「救済計画」は革命と似て非なるものだと思います。革命も救済も、現実に対する強固な否定の意志ですが、革命の場合、その否定のために、現実社会の中に反対勢力を作らねばならないとするリアリズムがあります。

朝倉 彼らは「救済計画」と言いますが、今のところ事態に至る歯車が回り始めたのは、麻原容疑者が黙示録の字句を現代に当てはめて解釈し出版した一九八九年の「オウム」です。

オウムの「救済計画」は革命と似て非なるものだと思います。革命も救済も、現実に対する強固な否定の意志ですが、革命の場合、その否定のために、現実社会の中に反対勢力を作らねばならないとするリアリズムがあります。

朝倉 彼らは「救済計画」と言いますが、今のところ事態に至る歯車が回り始めたのは、麻原容疑者が黙示録の字句を現代に当てはめて解釈し出版した一九八九年の「オウム」です。

オウムの「救済計画」は革命と似て非なるものだと思います。革命も救済も、現実に対する強固な否定の意志ですが、革命の場合、その否定のために、現実社会の中に反対勢力を作らねばならないとするリアリズムがあります。

朝倉 彼らは「救済計画」と言いますが、今のところ事態に至る歯車が回り始めたのは、麻原容疑者が黙示録の字句を現代に当てはめて解釈し出版した一九八九年の「オウム」です。

オウムの「救済計画」は革命と似て非なるものだと思います。革命も救済も、現実に対する強固な否定の意志ですが、革命の場合、その否定のために、現実社会の中に反対勢力を作らねばならないとするリアリズムがあります。

朝倉 彼らは「救済計画」と言いますが、今のところ事態に至る歯車が回り始めたのは、麻原容疑者が黙示録の字句を現代に当てはめて解釈し出版した一九八九年の「オウム」です。

オウムの「救済計画」は革命と似て非なるものだと思います。革命も救済も、現実に対する強固な否定の意志ですが、革命の場合、その否定のために、現実社会の中に反対勢力を作らねばならないとするリアリズムがあります。

朝倉 彼らは「救済計画」と言いますが、今のところ事態に至る歯車が回り始めたのは、麻原容疑者が黙示録の字句を現代に当てはめて解釈し出版した一九八九年の「オウム」です。

オウムの「救済計画」は革命と似て非なるものだと思います。革命も救済も、現実に対する強固な否定の意志ですが、革命の場合、その否定のために、現実社会の中に反対勢力を作らねばならないとするリアリズムがあります。

一步上っていくのと違った、すみやかな上昇です。また若いのに多くの金、人員、権力をまかされる立場に立つ。だから幹部はとも生き生きしています。それが出家者の修行でもある点が普通の組織とは違うわけですが、実は、出家者として守るべき戒律は、財産を寄付するとか家族がバラバラになるとかを除けば、ほとんどありません。自由で、世俗の仕事がそのまま「ワーク」になる。

朝倉 意図的に本気で考える部分と、無意識的にそっぴり自分を追い込んでいく欲求というのが、重なりあっているのではないのでしょうか。オウムに集まった人々からは、あらかじめ自分が裏切られる場所に近いところから、現実への手ごたえを得ようという潜在的欲求を感じます。

橋爪 機関で決定しようにも、機関なんか何もないと思うので、何なのでしょう。

朝倉 意識的に本気で考える部分と、無意識的にそっぴり自分を追い込んでいく欲求というのが、重なりあっているのではないのでしょうか。オウムに集まった人々からは、あらかじめ自分が裏切られる場所に近いところから、現実への手ごたえを得ようという潜在的欲求を感じます。

朝倉 彼らは「救済計画」と言いますが、今のところ事態に至る歯車が回り始めたのは、麻原容疑者が黙示録の字句を現代に当てはめて解釈し出版した一九八九年の「オウム」です。

朝倉 彼らは「救済計画」と言いますが、今のところ事態に至る歯車が回り始めたのは、麻原容疑者が黙示録の字句を現代に当てはめて解釈し出版した一九八九年の「オウム」です。

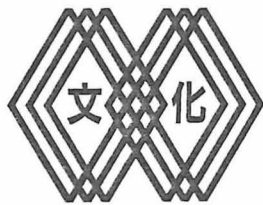
朝倉 彼らは「救済計画」と言いますが、今のところ事態に至る歯車が回り始めたのは、麻原容疑者が黙示録の字句を現代に当てはめて解釈し出版した一九八九年の「オウム」です。

朝倉 彼らは「救済計画」と言いますが、今のところ事態に至る歯車が回り始めたのは、麻原容疑者が黙示録の字句を現代に当てはめて解釈し出版した一九八九年の「オウム」です。

朝倉 彼らは「救済計画」と言いますが、今のところ事態に至る歯車が回り始めたのは、麻原容疑者が黙示録の字句を現代に当てはめて解釈し出版した一九八九年の「オウム」です。

朝倉 彼らは「救済計画」と言いますが、今のところ事態に至る歯車が回り始めたのは、麻原容疑者が黙示録の字句を現代に当てはめて解釈し出版した一九八九年の「オウム」です。

朝倉 彼らは「救済計画」と言いますが、今のところ事態に至る歯車が回り始めたのは、麻原容疑者が黙示録の字句を現代に当てはめて解釈し出版した一九八九年の「オウム」です。



高度消費社会の段階になると、自分がどうしたらいいかさえ、メディアに依存しないと決められなくなる。ヒトをつなぐメディアが

朝倉 悪魔払い殺人事件というのが、一九八七年に神奈川県藤沢市で起きた。三人の男女、一組は夫婦ですけど、三人で一緒に飛び出し、自分たちで新しい宗教を作ったことばかりです。そこそこするうちに、女性の夫にあたる人に悪魔がついてると言われて、女性とリーダー格の男が夫を殺してしまふ。死後も悪魔払いと称して死体を解体し、塩水で洗い、骨にまでしてしまふ。殺すことによつて初めて善悪二つが対

り後までひきずられるようになってしまった。

朝倉 前世とかカルマとかで自己解決する人が多いでしょう。今、自分はこうだけど、本来の自分は違うというように、それも一つの自己防衛なのかなと思いますね。オウムの場合で言うと、超能力も自己防衛のモチーフですね。時代的にはオウムという組織は、バブル経済が吹き上がった時期に急成長した。そのへんとも照応

は望ましくないことですが、事件の大きさがみれば、そうしないわけにもいきません。

もうひとつの情報はオウム教団の広報ですが、これは宣伝に等しい。情報をきちんと編集し、真実に迫るものとして提供すること、ほんごのメディアは失敗したんじゃないでしょうか。テレビなどは、劣ってます。視聴率が取れると飛びついた。

朝倉 いろんなメディアが団子状態というか、同じような送り方になっていくのが、大きな問題です。これまでは、各種メディアの扱い方の微妙な違いを通して、受け手は情報に対する遠近感をとることができましたが、今回はその足場がなくなりました。このままでは、それこそ「終末」になってしまう。

朝倉 捜査情報そのみにしたために、誤報を生んだ松本サリン事件の時と、何も変わっていません。今回はまた「真犯人らしい」ので救われているだけでしょう。

朝倉 三月の地下鉄サリン事件直後の報道で気付いたことですが、多くの記事に「新聞紙に包まれたサリン」といった表現がありました。しかし、サリンを新聞紙に包めるはずはない。捜査の都合などによつて、こうした表現になった事情も合わせて書かないと、読者には分かりません。新聞紙とサリンを簡単に結びつける非合理的報道は、読者の無意識に強力な作用を及ぼすと思えました。

橋爪 今回の事件を、当局は「国家への挑戦一みたくに感じました。だから、刑事事件として解決をはかるとは別に、麻原代表を教祖としての偶像の座から引きずり降ろすことも、国民の合意、期待を背景に逮捕する必要があったのだ」と想像できます。

そこで、隠れ方がおさまるとか、「お昼ご飯はまたか」と言っていたとか、教祖にさきわくはないこととがこんなにある、というリンクが行われ、マスメディアはほとんどその言いにのって報道してきました。いわば国家意思との二人三脚みたいなになってしまったことが残念です。

——「陰謀説」が言われたり、今回の事件には「闇(やみ)」がある、という声もあります。

橋爪 三つの可能性に分けて考えてみたいと思います。

肥大化するということは、ヒトが希薄になり現実感を喪失するということなんです。

さらに九〇年代につけ加わったことに、冷戦の解体があります。世界を支えていた方向感覚、歴史感覚が消失しました。世界を秩序づけていた核戦争の重荷が取れ、民族紛争が勃発するなど、混乱が生じています。知識の枠組みが崩れ、サブカルチャーと高級カルチャーの区別もなくなりまして。

立してリアルな関係が営める空間が生まれるという構図なんですよ。

犯罪は生きてきたことの突き当たり、最後の決算として、これまでであったわけですが、この場合、犯罪を通過することによって悪魔がいかに善があり、対話が成り立っています。こういうように、犯罪を通過することによって初めてリアルな関係が生まれるという例が八〇年代以降、随所に見られ

るようになっていきました。

橋爪 いまの若い人は、現実へのあり方が特殊です。昔の人々も決して現実を喜んで受け入れたわけではなくて、いやいや巻き込まれ苦労しながら一生を送っていたのですが、現在は豊かになっていまして、現実を拒否され、リアリティが感じられなくなるとも自分を守る方法があるのです。

たとえば個室で、個室に象徴される現実遮断の仕方があります。親が何を言おうと、自分の部屋に閉じこもれば、自分の精神世界を守ることができます。大人になれば個室を出なければならぬが、メディアの中に個室を作って住むことが可能になりました。

メディアはもはや現実を反映するものではなくて、受け手の欲望を反映するものになりました。非常に細分化されているし、受け手に奉仕するようになっていまして、メディアの個室の中では、自分を守ることができるし、現実を拒否できる。本来十代のころに乗りこえられないはずの精神状況が、かな

社会学者・東工大教授

橋爪大三郎氏

# 脱冷戦で方向感消失

## 「個室」作り 現実を遮断

するようになる気がします。

——メディアの対応について

橋爪 でも、いままで報道されたことが真実であるという確証は、まだないと言っています。事実を照らし合わせ、すべての帳尻が合つて初めて、仮説が正しかったことになるわけで、メディアには警察発表とは違った独自の取材や活動を願っています。そうした中から、我々が予測もしなかった事件の側面が明らかになる可能性もあります。

朝倉 我々が生きている時代の中にこの事件を投げ出してどう考えるべきでしょう。この間、これまで破防法に反対してきた宗教教団が突然、オウムに内乱罪を適用せよとかが言っているのを聞いてびっくりしましたが、そんな臭い物にふたをしてみても、何かを解決していいかなんかできません。

# 鏡 対談編

## オウム真理教と犯罪 下

### 現実感の喪失

評論家

朝倉 喬司氏

# 動機が見えない殺人

## 組織された超能力願望



朝倉 喬司氏(右)と橋爪大三郎氏(左)の対談の様子。

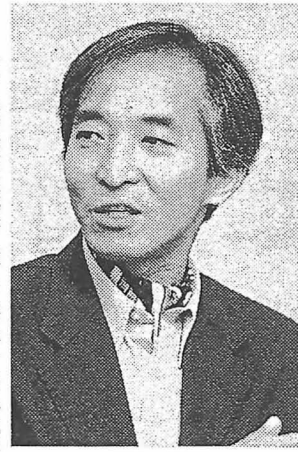
朝倉 背後には何もない、と考えるべきだと思います。高度情報社会に生じた一つの力の場、普通にはなんでもない超能力願望や様々な欲求、想像力が、ある仕方と組織されてしまった。そんなところから起つた事件であるような気がしますが、ただ、今までの事件の図式からは、はみ出して解釈していかざるを得ないのは確かだとは思いますが。

——陰謀説——というのは、東西対立の時代に作られた解釈の構図です。なにかちよつとした微候があっただけで、あつと言つた図式に当てはめ、事実の断片をつないで解説まで作ってしまう。そんな想像力のあり方は、事態を見誤らせ、泣かなくていい人間まで泣かせてしまふ。

朝倉 背後には何もない、と考えるべきだと思います。

高度情報社会に生じた一つの力の場、普通にはなんでもない超能力願望や様々な欲求、想像力が、ある仕方と組織されてしまった。

朝倉 背後には何もない、と考えるべきだと思います。高度情報社会に生じた一つの力の場、普通にはなんでもない超能力願望や様々な欲求、想像力が、ある仕方と組織されてしまった。そんなところから起つた事件であるような気がしますが、ただ、今までの事件の図式からは、はみ出して解釈していかざるを得ないのは確かだとは思いますが。



吉岡 忍氏

オウム真理教の急成長の理由をどう考えるか。吉岡 これまで日本の学歴社会や消費社会を支えてきた価値観が求心力を失う中、若者たちには「このままではいいのだろうか」という共通の意識がある。事件のなかには信者以外の若者とも話をしたが、「何となく分かる」「自分分はオウムに近い」と言う人も多かった。信者が増えた土壌は、広くこの社会にあったと思う。まじめな若い信者たちに、麻原代表は「自己を越える」とか「世界をどう理解するの」といって、彼らなりに理解できる道筋を説明した。本来なら、教育や教養が説明すべきものだが、競争責任の問題をないがしろにしてきた戦後日本には、自己と世界との関係を解き明かす本格的な思想は育っていない。いわば、その代役を麻原代表が信者たちに対して務めたのだと思う。

福島 成長の原因は宗教や教養の魅力よりも、むしろ信者を獲得する手段がなかったか。いわばキャッチセールスのように、初めはエカや超能力など若い世代が魅力を感じそうなのを目の前に提示して誘い、だんだんと宗教に取り込んでいった。また、肉体的修行から入り、身体的な快感や変容を経て精神的に変わっていくという、「体へのこだわり」も若者ブレイクしたのではないか。現代の若者はナルシシズム的な傾向がある。現代日本の社会・思想状況とオウムとのかわりをどう考えるか。吉岡 バブルが崩壊し、官僚批判が強まり、いい学校がらいい企業・官庁へと成り上がっていくことが、魅力的に思えなくなっている。私には七〇年代から八〇年代にかけての日本の思想状況が「継ぎはぎのパッチワーク」のように見える。オウム真理教の大きな特色はパッチワークやキリスト教の概念、ユダヤ陰謀説、対米批判など、あらゆるもののパッチワークだが、それは日本の思想状況の戲画的な生き写し。現場や歴史を見る目が欠けている。この二十年来の日本社会が生み出した

鬼っ子的な存在——現代日本の社会・思想状況とオウムとのかわりをどう考えるか。吉岡 バブルが崩壊し、官僚批判が強まり、いい学校がらいい企業・官庁へと成り上がっていくことが、魅力的に思えなくなっている。私には七〇年代から八〇年代にかけての日本の思想状況が「継ぎはぎのパッチワーク」のように見える。オウム真理教の大きな特色はパッチワークやキリスト教の概念、ユダヤ陰謀説、対米批判など、あらゆるもののパッチワークだが、それは日本の思想状況の戲画的な生き写し。現場や歴史を見る目が欠けている。この二十年来の日本社会が生み出した

宗教法人となつてわずか六年足らずで一万人の内信者を得て、海外にまで活動拠点を広げていったオウム真理教。信者の中には、まじめで優秀な若者も数多く加わっていた。「ハルマゲドン(人類最終戦争)」を唱える入終末の教団が、九〇年代の日本社会で急成長を遂げた理由は、何だったのか。オウム問題に関心の深い社会学者、精神医学者、作家の三人に「オウムを生んだ時代」について、語り合ってもらった。

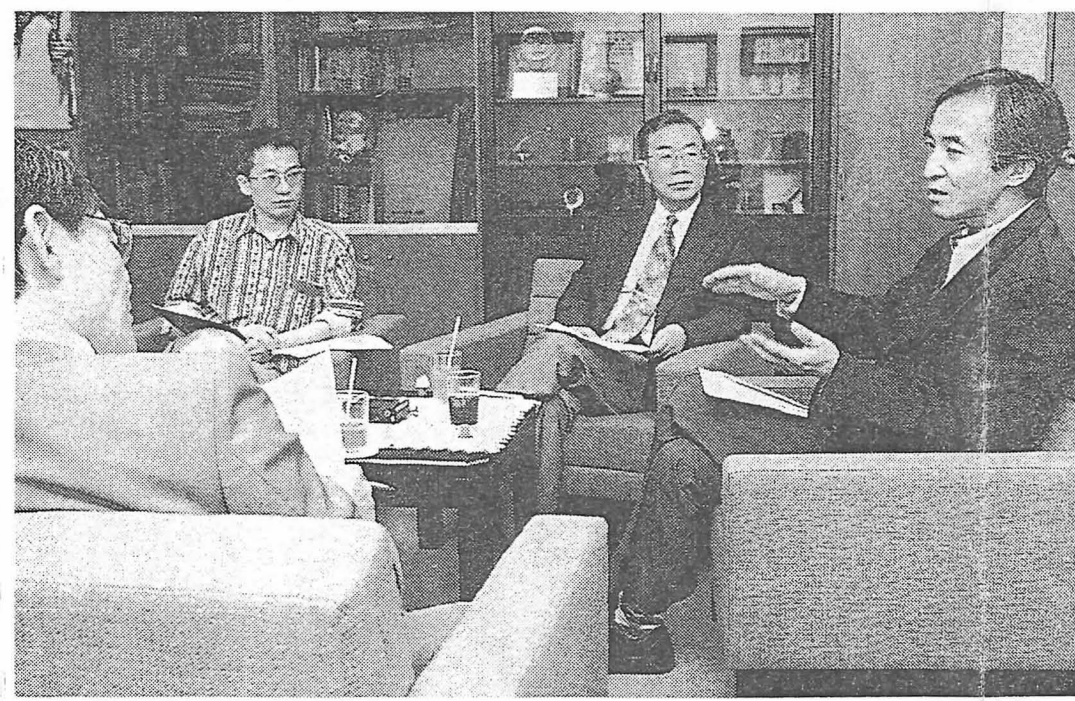
# 幻想を与えたオウム

- 出席者**
- 橋爪大三郎 東京工業大教授 (社会学)
  - 福島 章 上智大教授 (精神医学・犯罪心理)
  - 吉岡 忍 ノンフィクション作家 (山室寛之、編集局次長兼社会部長 (五十音順、敬称略))

「鬼っ子」がオウムではないか。福島 私はイデオロギーや宗教の相対化が進んでしまっただのではないかと考える。

## 混乱する若者誘う

昔はメジャーとマイナーという区分けがあった。しかし、それがなくなり、「二流」も「三流」もある。自分の身の丈にあったもので、心に響けばいい。という時代になった。オウム



オウムを生んだ時代背景について語る(右から)吉岡、福島、橋爪の各氏(左端は山室社会部長)

の教義には、深遠な教知に満ちた教えがあるわけではない。「マイナーはマイナーでいいんじゃないか」という気持ちで若者の中に蔓延している感じがする。福島 オウムの特徴としてまず挙げられるのが思想的な混乱。もう一つは、それも混乱している中で自己肯定しようとしている点だ。全共闘世代の若者たちは、まず「自己肯定」を口にした。自己肯定の場合には多様な手続は省略でき、歴史観による分析など必要ないと考えられている。混乱していても、なだに自己肯定をすればいい。しかし

「鬼っ子」がオウムではないか。福島 私はイデオロギーや宗教の相対化が進んでしまっただのではないかと考える。

終末観と使命感——省庁制など、国家を模っていた教団の目的は何だったのか。吉岡 オウムがミカ道場から始まり、人を集めていったのは八〇年代。社会主義が崩壊し、ベルリンの壁が崩れるなど、世界が大きく動いた。日本にとってその時代は、本来冷戦後の世界をどう考えるかという価値観や理念を立て直す、あるいは作り出す時期に当たっていた。しかし、そういうことをせず、何が価値観か分からない消費社会ができた。こうした状況の中で麻原代表が示したのが、終末観からそれを解き明かす教義だった。市民社会を何とか救わなければという使命感や、世界はなくなるという終末観から、性急さが生まれ、宗団家として体裁を整えて世界を救済する「オウムイデア」を作り上げたのではないかと

# 識者座談会



福島 章氏

「福島 麻原代表自身が、国家に対決するものとして必要だったのだと思う。そういう麻原容疑者の精神病理に追随する形で、一種の集団ペナルティになったのではないかな。麻原代表にとって国家は「父親」ではないか。六歳の盲学校の寄宿舎に入れられ、これが父親に捨てられたという深い精神的体験になり、父親的存在に対する恨みの感情を刻み込んだ。彼は父親と同じように強い、偉い存在になりたかったというコンプレックスを持って育ったと思う。ところが東大は不合格となり、万能薬を作ったと思ったら薬事法違反で警察に拘留される。総選挙に落選し、波野村(熊本県)で自分たちの王国を作ろうとするが国士法違反で強制捜査を受ける。彼を拘束するのが「国家権力」に代わり、幼児期の父親を象徴的に同じ意味を持つようになった。この「父親」に勝つため、自分の組織を国家にたて替え、パルティオの野望が形成されたのだと思う。

橋爪 オウムは、価値相対主義の混沌とした日本に、価値絶対主義の真理を対置しようとしてきた。だが、それは言わば「石を物」。その日本に現実以上の現実を自分たちが提供しているを証明し続ける必要があり、二つの「いざこざ」に思いつき、手すけした。信者が増え、いく。我々の現実は一いつの現実が最後に戦い、自分たちの現実が正しいことが証明される。これがホルムゲテンなエドムドの手形を切る。ところが、ホルムゲテンが本当に来るのか、自分たちの真理が正しいか本証に証明されるのか、事前にはわからない。日本社会が消え去った後のことを考えている。と態度を示さなければ、自分たちが本気で「いざこざ」を証明できない。そこで省庁制、国家をあげて考えたのではないかな。

「確信犯」の論理  
——その教団と「地下鉄サリン事件」という犯罪は「いざこざ」の結ぶ対の面。

吉岡 価値相対主義の日本の現状に対して、憎悪に近いものがあつたと思う。彼らの論理に従えば、地下鉄サリン事件で社会を支えている人も、その加担者たるもあり

# 絶対価値不在の社会

報いを受けてしかるべき、となるのだ。

福島 麻原代表は誇大妄想と同時に、二つの現実の国家に力をつけて押しこめられるか、二つを被害妄想も持っていた。そこへ強制捜査の情報があり、国家権力の象徴である霞が関を攻撃したのではないかな。犯罪学ではない、二つのを被害者のな加害者と呼んでいる。

橋爪 被害者にすればいい迷惑だが、一般市民は無関係でなく当事者だから殺されて当然という世界観はあり得る。さまざま宗教で、化学

## 心のケアが必要

——信者の社会復帰についてはどう考えるか。

吉岡 社会復帰はある意味で簡単なことと思う。最初に言ったように教団や教養はパッチワークであり、日本社会もパッチワークの状態である限り、信者は同じ環境に戻らなければ。

福島 信者は二つのグループに分かれると思う。二つは宗教法人が解散しても自力修行のグループに戻り、サークル的に続けていく。もう二つ

## 弱者前提の視点を

物質などを使った無差別な殺害行為のイメージは、そんなに珍しくない。ただ、実際に実行する意思と能力を持ったグループが、現れなかったというところだ。

吉岡 七〇年代の前半、連続企業爆破事件があった。あの時の論理も大手企業が帝国主義の先端にいて、社員は先兵であり、当事者である。それとそんなに違っていない。

橋爪 気分はとも似ているが直感した。

福島 両方でも「確信犯」の論理だと思ふ。

は生きていく上でイチオロキや信仰が必要なんだ。二つの別教団に移るだろう。三つ目は、宗教はもろいけど、政治的行動に問題があった。信仰そのものが悪いわけではない。社会として温かく迎えてい。心のケアを積極的に行わなければならない。

橋爪 キリスト教を名乗った教団の問題は教師と神父が活躍した。オウムがインチキ仏教といふことでは、キム教といふことでは、出家修行の方法が間違っていた。本家の出家修行は、既成仏教が



橋爪大三郎氏

修行の場を提供するところが大変難しい。ところが、日本には小乗の出家修行をする教団はないし、大乘の禅宗も、だれでも自由に来るとなっているから、修行を続けながらオウムを批判的にみられるようになればベストだが。

——オウムのような集団を生き出さないためにはどういう社会を自指すべきか。

吉岡 日本社会は確信を持ってなくなっている。何ぞだれを信じていいのかわからない。もう一度、日本の歴史や他国の文化など、国境を越えての合わせをすべきだ。各国と自分たちがどう生きていくか、どういふ価値感を構築すべきか、各自が持つべきものを、各自が持つべきものを出して、国際的な公共空間を作っていく必要があるのではないかな。

福島 麻原代表のオウムの人が出てくるとは言えない。米西海外では十年々らう前からカルト教団が次々と生まれては消えている。やがて日本にも、そういう時代が来ないとも限りない。現代の日本には柱になるオウムの人がいないのが問題で、再発を防ぐためにはどういふ情振教育をする必要がある。

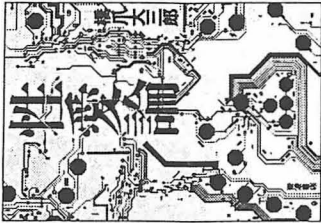
橋爪 日本の教育が宗教や哲学をなせ扱えないのかというところ、教育の目標を社会、集団、国家との調和に置いていっているという感覚が、あつていないから。社会と矛盾して個人として自由に生き、信念を貫くことを大切に教えない。このため、宗教も哲学も

たんの知識になり、自分の生き方と関係のないものになる。人間が一人でも生きられるというところが大切だ。大企業体制が崩れつつあるとはいえ、集団に属してないクレジッターカード、二作れない。昔は農民、商店主、自営業者のように組織に属さない人が多かったが、いまは管理されるタイプの人間ばかりになった。教育の理念を個人の自由と尊厳に置けば、出家者として一生送ることも人生の選択肢になる。そういう人たちが仏教文化を支えれば、インチキ宗教の出る確率は、今更、オウムを正面から論破する仏教者、仏教学者がいなくなったのが残念だ。

吉岡 いままでの日本の学歴社会、企業社会は強い個人、頑張る個人を前提にして成り立ってきた。しかし、圧倒的多数が実態としてはみ出している。七、八〇年代の消費社会は、はみ出した弱い個人をつつと止める機能を果たしてきたが、バブル経済の崩壊以後はそれもできなくなった。これから、弱い個人を前提にした新しい社会原理を組み立てることが必要だ。

橋爪 ノーベル賞を受賞した大江健三郎さんの文学のキーワードは「穢」。穢が社会の中で力を持つようになったら、弱くならない。

## 性愛論



橋爪大三郎 著  
岩波書店・2200円

「ひととはなぜ愛するのか」。この問いをひらき

れた疑問が序章だ。それを大脳の生きた精神機能の介在と社会への表現、という観点から考えようとしたのがこの本だ。

たとえば、第二章・性別論。身体的な性別と社会的な性別のうち、後者を「われわれが性別として理解している」ものとし、そもそもの「性別」を認識したがるのか、という提起から始まる。その認識はやはり生物という文脈のものであり、それが異性愛の優位の裏付けになっている。そしてそれならば「性愛」としては、異性愛は同性愛に何ら勝る根拠を持たない、と展開する。

第四章・性愛倫理。初期キリスト教の性愛を、ユダヤ教の律法とイエスの喩という方法論の相違から読み解いていく。グリーンズ・中世キリスト教・ピューリタン・近代道徳を経て、現代の性意識まで至る。一九六〇年前後に「性の解放」と呼ばれたものを「性/愛の分解」と呼ぶ。性愛の即物的表現を経て形而上に戻るという考察は、現代のむしろ「性」にこだわらない形での人間関係や「セックスレス」にもつながるかもしれない。

終章のフェミニズムに関する言説は、うなずけるところあり、物足りないところありだが、フェミニズムが登場して以降、特に男性は性や性愛について語るのが難しくなつたという本書に免じて……?

(木倉孝子)